大手拓次詩畫集

正規表現版・藪野直史注

年に大手拓次著で生前の友人で版画家の逸見享(へんみたかし 年十一月三日生まれ。昭和九(一九三四)年四月十八日午前六時三十分、誰 で龍星閣から刊行された。 〜昭和一九(一九四四)年)氏(以下の底本の奥附の「邊見享」は誤字)氏の編纂・装幀 [やぶちゃん注:「大手拓次詩畫集 結核により茅ヶ崎南湖院にて逝去。享年四十七)から六年後の昭和一五(一九四〇) 蛇の花嫁」は大手拓次の死(明治二〇(一八八七) 明治二八(一八九五)年 にも看取られ

私は既に十年前に、

ブログ・カテゴリ『大手拓次詩集「藍色の蟇」』

で全電子化注を完遂、

サイト版で詩集「藍色の蟇」の注附初版ヴァーチャル再現版

も公開している。

舗」の文案係に就職、当時既に同社意匠部に勤めていた逸見と知り合っている。彼は孤独 大学文学部英文科を卒業後、大正五(一九一六)年には貧窮に堪えず、「ライオン歯磨本 な拓次の数少ない親友であった。 プ・データ)の旅館「蓬莱館」の次男として生まれた。大正元(一九一二))年に早稲田 大手拓次は群馬県碓氷郡西上磯部村(現在の安中市磯部)の磯部温泉 (グーグル・

電子化したが、本ファイルではなるべく詩篇が切れないように配したことから、 なポイントのものと殆んど同じポイントのものが混在するが、電子化では、一貫して同じ少 **群の中では特異的に総てが音数律を意識した文語詩である。** 拓次の絵も見られるのでリンク の左に有意なパートがでるのは、その仕儀と御承知戴きたい。 し大きなポイントで統一した。ストイックに注を附した。各詩篇は、三行空けを基本として を張るが、「本登録」しないと見られない。 なお、各詩篇の標題は詩篇本文よりやや大き目 定」の画像(中見出しページ)を視認して電子化する。この内の詩篇は拓次の知られた詩 底本は国立国会図書館デジタルコレクションの「国立国会図書館内/図書館 時にペ 個人送信限

参照されたい。 Bookface 氏のブログ「bookface,s diary」の「蛇の花嫁 ト上には見当たらない なお、底本は国立国会図書館によって後に外装が作り替えられており、面影を残さない。 以後、「藍色の蟇」以外の詩篇を自由に電子化しようと思っていることから、改めてブ ・見開き部分(?)及び詩本文の前に掲げられている拓次のデッサンが見られるので ・カテゴリ「大手拓次」を立てることとした。なお、本詩画集の詩篇の全電子化はネ (抄録版は幾つか認められるが、どれも収録数が非常に少ない)。 大手拓次詩画集」で、 表紙らしき

藪野直史】] 本ファイルはブログ・カテゴリ「大手拓次」での分割(全三十二回)電子化注を終えた あらためてルビ縦書PF一括版として公開 したものである。 【二〇二三年二月十三日

蛇の花嫁 大手拓次詩畫集

以下は、見返し。字は実際には、かなり薄い灰色である。][やぶちゃん注:前のリンク先の画像に拠った表紙らしきもの。

蛇の花嫁

[やぶちゃん注:続いて、中扉標題。]

蛇の花嫁

大手拓次詩畫集

点の活字の大きさが異なる(約半分) [やぶちゃん注:以下、 「まへがき」。 ため、綺麗に下方が揃わない。] 底本と一行字数を同じにしたのだが、 底本では句読

まへがき

よしさらば、われこの思ひのなかに命を絶たむ。の彼方へ送りゆく柩車のきしりならむ。この苦悶の淵にありて吾を救ふは何物にもあらず。みづか悶の淵にありて吾を救ふは何物にもあらず。みづかいを削る詩の技なり。されば、わが詩はわれを永遠の彼方へ送りゆく柩車のきしりならむ。この苦れがおもひ盡くるなく、ひとつの影にむかひて千

[やぶちゃん注:「**まへがき」の次の次の左ページのここに、**

蛇の階段

1920,5,16,

られたものである。なお、これらのおびただしい文語詩は、すべて特定の女性目あてに書か あった。『死後、昭和十五年に刊行された詩画集『蛇の花嫁』は、「九月の悲しみ」稿より採 紙ノート詩作を残す(死後刊行された『蛇の花嫁』とは内容的には無関係)』とあったが、 れたもの。「わたしはつねに思ふのは相変らずひとりの人である。そしてその人を対象とし 和五(一九三〇)年(満四十三歳)の条に、『昭和二年以降におびただしい文語体小曲を 思わず、私は当初、その年のデッサンかと思い込んだのだが、さらに後の年譜を見ると、昭 年の十一月三日で満三十三歳。以下同じ)、『春ごろ「未刊の詩集・蛇の花嫁」と題する皮表 と記した奇体なデッサンが載る。このクレジットの「1920」の「2」は判読に迷って二転三 て詩ができるのである。無限に出来るのである」(詩稿欄外メモより)』とあることから、こ する『篇数』は『四百余』とあり、 の編になる「大手拓次詩集」(一九九一年刊)の年譜の大正九(一九二〇)年の条に(この 転した。それほどこの二桁目の数字は崩しがひどく、 「九月のかなしみ」と題する詩集仕立てのノート数冊に、浄書して残す』とあり、その収録 「1930」と判読すべきものであると一回は納得した。 同年条の末には、原先生の附記が丸括弧で以下のように 迷ったのである。岩波文庫原子朗先生 さて、 少しここで言っておくと、

(つ) 年なのである。 ○)年頌二月である。機械的にそこから『二十年前』ならば、 を描出しないでゐられなかつた彼の詩魂を思ふ時、私は今更乍ら故人の特異性の尋常ならざ そろしく幻想的なもので、その畫集の自序にもあるやうに、これは彼自身、詩では到底あら 彼を知る限りの人々は勿論のこと、私にとつても一つの驚異である。その畫集といふのはス あり、その「2」の中で逸見氏は『大手拓次が繪を描いてゐた!』『といふことはおそらく 詩篇を読むことなく、右から左へと捨てていたとも伝えられる)。拓次は結局、未婚であっ たことは、 知ってはいた。但し、この時点での拓次が秘かに愛した女性が具体的に誰であるかは不明で 私は既にして、 詩篇は確かに昭和五(一九三〇)年のものである-ることに深い驚きを感ずるのである』とあるのである。本詩画集の刊行は昭和一五(一九四 はせないものを繪であらはさうとしたもので、今から』(GP)『二十年前、旣にかうしたもの たが、例えば、大正一四(一九二五)年の十一月(満三十八)には、 年も前に遡るものだった― ケツチブツクにペン一色で描いたものと、色鉛筆で描いたものとの二册であつた。それはお の女性は歯科医院の受付をしていた、後に舞台「夕鶴」の主演女優として知られる山本安英 てより、三十代の頃は、通院している病院の看護婦や同僚(ある複数のネット記事では、そ いた従妹と、結婚を意識して恋愛関係にあったこともある。しかし、実は最後の逸見享氏の 「あとがき」(最後に電子化する) 全くかみ合わないグロテスクなデッサンであるのかという不審の理由が解けたのだ! それらの女性のデスクの引出に投函するという今で言うストーカー紛いのことをしてい どこまで信用できるかは定かでない)を恋慕し、ラヴ・レター代わりの短詩を書い 拓次は「ライオン歯磨本舗」広告部文案係(就職は大正四年六月。満二十七)になっ 彼女は「ライオン歯磨」にも短期間ながら務めており、 かなり知られている(投げ込まれた一人の女性は誰が投げ入れるのかも知らず、 そうした特定の女性に対する詩篇が大手拓次には膨大にあることは以前より そうだ!――本詩画集の詩と絵とが――どうしてこうも――徹頭徹尾― ―だから、奇体なデッサン群と、恋情満々たる恋愛詩群のコラボ の中に、これらのデッサンのことが語られている部分が が、絵は実は これはもう、大正九(一九二 拓次と同僚であったともす 同年夏以来、文通して -それよりもさらに十

サンについては、 が、文化庁の公式見解である。 さらに、平面的に撮影されたパブリック・ドメインの画像には著作権は発生しないというの て、ブログに掲げたものをリンクさせておく。同文庫には特に転載禁止事項を挙げておらず、 ページ下方に当該デッサンが使用されている。 なお、底本の画像は国立国会図書館に許諾を求めなくては掲載出来ない。但し、このデッ 前掲の岩波文庫のカバー(写真)と本文の「初期詩篇 そこで、その後者の方を、 (明治期)」の標題 トリミング補正し

という奇妙な詩画集となったのだ!-

-と納得したのであった。

繒について

――畫集の自序―-

之はみんな幻想のスケツチである。
さはすほかに畫でやつてみたくなつた。
書なんかすこしもかけない私だが、あたまの中の幻想があふれ出して、どうにもかうにもからにもからに、私も子供になつてかきはじめる。

ないので、無視した。
「やぶちゃん注:以上の本文は実際にポイントが小さいが、 わざわざ読み難くする必要は

以下、正式詩篇本文となる。]

序詩

わがたましひのよろこびなれ狐獨なる夜のしずけさこそ いのりに生くるわれなればふかき底にすわりて

しろきもの

しろきもの ゆくりなく 心のうへをただよへり ながるるひまもなく あはきがなかに なほあはき あったがまれた。

ほのあをき貝

わがかなしみを をさめよわがただよへる心を をさめよほのあをき貝をもて

語らざる言葉

語らざる言葉よいかに そは美しからむかぐはしきにほひんのなかに みちみちてわがさゆらぎにさへ

そよぐもの

――都の南方にきみは在り―

そよぐものあり 草の葉のあはひをかすめ 草の葉のあはひをかすめ 葉立の鳥のふるへるごとく 集立の鳥のふるへるごとく かなな。 である。あをきかなたへ ひたぶるに そよぐものあり

ふるへる羽

かろく はげしく ふるへのなかに かろく はげしく ふるへのなかに こめたるを

ふるへる羽を

いとしめよ

相見ざる日 (斷章六篇)

明日もまた はかなく すぎてゆくならむけふもみず わするることのなききみをおもひつつ

×

身をつつむ ひぐらし色のこゑうなだれてのみ あるものをこころ おもくして

とほくゆく 言の葉のかげおもひをちらし せんしん かくれて

はつるなきこゑ さそふらんこの秋は みづのいろあはく

わがむねに きたれようるはしき運命よ かれにきたれよ

とざされしものよ

にほひは かくもただよへるに

つぼみなるものよ ひらけよ

わが心もて

きみが心に 溶けいらむ

それらしく入れたに過ぎない。以下もこのマークが出たら、同じである。] [やぶちゃん注:「w」のマークは、底本では、もっとシンプルな図柄。Unicode のものを

ほがらなるこゑ

汝がこゑの

ほがらなる日は

わがこころ いともたのし

汝がこゑの

小鳥のごとくまろき日は

わがこころ かろやかにをどるなり

汝が顏のしづめるとき

汝がかほの

しづめるときは

わがこころ

もののへだてを のぞきけり

汝が心へと ちかづけり

さだかならぬ姿

ありなしの すがたなればや

きみみえず

うすきひかりの よびいづる

わがながめしを

うたの心

あめは こずゑのなかにあり

うたはざる 歌のこころの

ゆふぐれに ときめけり

秋の日はうすくして

衣に透けり 秋の日は うすくして

秋の日は

みえざるごとく とほくして

思ひのかげを うごかせり

二人静

二人静のはな 月の夜にゆるる がたりしづか 次がこゑは

〔自註〕二人靜は植物の名

[やぶちゃん注:「二人靜」被子植物門双子葉植物綱センリョウ目センリョウ科チャラン

於ける静御前と、その亡霊の舞姿に喩えたもの。参照した当該ウィキを見られたい。学名属フタリシズカ Chloranthus serratus。和名の「二人静」は二本の花序を謡曲「二人静」に のグーグル画像検索もリンクさせておく。]

あまりによわく

うていながら……しかし……」の意で躓かない。] しい上に、音数律も悪い。見かけない用法だが、「みうべく」と読んでおく。 [やぶちゃん注:「見うべく」はママ。「まみうべく」では前の助詞「を」が不均衡でおか 「見ようと思

夜の祈りをささぐれば

きみ われとともにあり 夜のいのりを ささぐればきみがために

わがあこがれを さそふなり風にゆるる花のごとくも

日もすがら夜もすがら

汝がおもひにて 夜はよもすがら ではよもすがら みちみてり

みちみてり

咲つづき 咲きつづき

おとさへもなし

心のかげのこゑ

わが心のなかに

汝がこころの かげのこゑ ゅふぐれのひかりをあびて ただよひゆくは おとづるる

め(斷章二篇)

ゆ

そのいろの わすれがたかりいづことも わかねども

X

絶えせざる おもひはるけしあはあはと にほひのこれば

夜となれば

版の注の中に掲げておいた。] 所持する岩波文庫原子朗先生の編になる「大手拓次詩集」(一九九一年刊)のパート標題 ページの下方に、このデッサンが使用されていたので、トリミング補正して、当該ブログ ンが載る。右肩に「狂人の心理」とあり、下方に「1920,5,30」とクレジットがある。なお、 [やぶちゃん注:この詩篇(右ページ)の見開きの左ページに、大手拓次の奇体なデッサ

われてある。上記タイトルは正しい標題で示した。詳しくは、 [やぶちゃん注:以下の十六篇は、総てが標題の印刷を誤っており、総てに手書き修正が行 各詩篇の後注で述べた。]

さびしさの消ゆる日は秋雨の日

わが心のごとく かりいでぬ

をのおもひ いよよしづけくあめの日に 汝をおもへば

汝がこころ

ちかくにありぬ

従い、 図書館に納本した際、逸見が誤印刷を手書き修正したものと推定されるので、本書の体裁に 再現した「秋雨の日」の字間は後の誤印刷のそれに合わせて半角を入れておいた。] があるが、そこには本詩篇標題を「秋雨の日」と印刷されてあることから、これは国立国会 雨の日」と書かれてある(孰れも薄い)。本書巻末の逸見享の「あとがき」の前には「目次」 [やぶちゃん注:底本では標題には鉛筆書きで、抹消線(一本線)があり、 特異的に赤字で示した(抹消線のみを黒線にすることは出来ないので悪しからず)。 その右に「秋

女が夫へころる

われはただ 生くるなり なやみよ

再現した。] [やぶちゃん注:前注と同じ状態で、 同じ処理をした。 「なやみ」 は後の誤印刷のそれを

さびしさの消ゆる日は 秋雨の田

とほのくの日は いつならむああ このさびしさの

このさびしさの

消ゆる日は いつならむ

きみが心をもとめゆく

このさびしさの果つる日は

Word では抹消線がガタガタになるので、諦めた。] それに合わせて同前の処理をした。「秋雨の日」は字間が半角あくが、それを入れると、 [やぶちゃん注:前注にほぼ同じだが、ここの**抹消線は二本線で、修正標題は左側にある。**

汝が前にあるは時

なやみ

汝がまへにあるときは

言葉とざされ

こころ うつろに

われにもあらず たたずみて

汝がおもざしに 見入るのみ

[やぶちゃん注:前々注に同じ。同前の処理をした。]

遠く思はるる日

蘆の葉のごとく

汝がすがた とほくして

空にうつれる葉のごとく

さびしさは わが胸に波をうがてり

「やぶちゃん注:同前状態で、抹消線は二本認められる。 同前の処理をした。]

鳥の影

わがかたはらの用半

くずをれて

ひかりのうちに 舞ひおつる

おもひむなしき 鳥のかげ

こゑもあらずに

きえゆけり

「やぶちゃん注:同前状態で、抹消線は二本認められる。 同前の処理をした。「鳥の影」

は後の誤印刷の字配を再現した。]

蘆の葉のごとく

遠く思はるる日

病みて われ

ひとり おもへり

このままに

あをじろき 薔薇の香につつまれて

蘆のひと葉のごとく

いのち絕えばやと

鳥-の-影 わがかたはらの月光

月のひかりは

ひそかにも

わがそばをあゆめり

ほのじろく

月のひかりのたたずめり

[やぶちゃん注:同前。]

九一月すぎし影

病めるとき

かげともあらあぬ 影のかげ心のなかにすぎゆきし

その すぎゆきしにほひをば

ひそかに

はぐくめり

[やぶちゃん注:同前。「すぎし影」は後の誤印刷の字間を再現した。]

しめらくる花ゆふぐれ

ひとびとの 行き交へり こゑもなく このゆふぐれの日に みぞれするかや

の誤印刷のそれに従い、字間を空けた。] [やぶちゃん注:同前だが、抹消線はない。紛らわしいので、引いた。「ゆふぐれ」は後

すぎし影 月

はじめの日 かの 九月の おとづるる

うちふせり こころ いたみて

みもよもあらず

うちふせり

影」は先に述べた不具合で字間空けを諦めた。] [やぶちゃん注:同前。「九月」の字空けは、先行する誤印刷の字配を再現した。「すぎし

しめらひの花の ともに でのさきけり しめらひの花のさらいり

ひとつさきけり

なっても、暗がりに、一日中、艶やかに咲いている(それが標題の「しめらへる花」)とけている、或いは、咲いているのに、朝、或いは、昼間に気づき、夜の満ち潮がくる頃に 中の「しめらひ」は「しみらに」と同義で「一日中」の意。紅色の花(種不詳)が咲きか いうのであろう。因みに、若山牧水の大正一一(一〇二二)年の一首に、 [やぶちゃん注:同前。「ゆふぐれ」の字空けは半角より大きいので全角で示した。本文 花も葉も光りしめらひわれの上に

というのがある。]

笑みかたむける山ざくら花

冬の日

あをき影

わがむねは への日の 対のいたさよ

うつつなく

たえまなく涙にみつ

[やぶちゃん注:同前。 「あをき影」は半角字間であるが、 前に述べた通りで、 諦めた。]

花をみつつも

由は暮るる

花をみつつも

わが心 泣きぬれて

夢のさなかに さまよひゆけり

[やぶちゃん注:同前だが、抹消線はない。 紛らわしいので入れた。]

あをき影

冬の田

あはれ あはれ

眼はとざされて みづにかくれし

なにものも みえわかず

ひとつ ひとつ あをき影あり

[やぶちゃん注:同前。 「あをき影」は前の誤印刷に則り、 半角空けとした。]

日は暮るる

花をみつつも

ひえびえとして

はやも けふの日はくるる

ああ われ何をおもへるや

このおもひ うたかたならず

すぎゆけど すぎゆけど

なべてみな 闇につつまる

[やぶちゃん注:同前。 これを以って標題誤印刷の手書き修正は終わっている。 没後の編集

巻及び別巻)を出版されているが、出版直後から、その全集の誤りや不備を多くの著作の中 故人の畫集から若干の繪を採つて、詩畫集として出すことになつたのである。』とあること 至つては故人にとつてこれ程完全な詩集』はないとあり、『これは立派な詩集だ。このまゝ 次の詩集の出版に尽力した櫻井秀男氏は本書の出版を待たずして、亡くなっていたことが判 的状況にある」とお答えになったと伝え聴いた。 なった教え子に、 は編者の一人として一九七○年から一九七一年にかけて白鳳社から「大手拓次全集」(全五 で好い。このまゝ印刷にかけやうぢやないかと一決した。そして、それと同時に發見された この原本の拓次本人の手書き詩集について、『最後に目次まで附されてゐるといふ入念さに 次氏の責任が問われるべきところではあるが、本書の逸見氏の「あとがき」で、実質的に拓 れは編者である友人逸見享の校正洩れによるミスである。出版時に版権を所持していた親族 で訴えておられ、新全集を出すと意気込んでおられた。 おきながら、遂に出さなかった(私はある疑いを白秋に持っている)。また、故原子朗先生 からは、若干、拓次自身のミスの可能性も排除は出来ない。にしても、これだけごっそりと ったので、ここはやはり逸見氏に責任はあるのである。 であるから、本人でなくては、製本途中では、気づかなかったにしても、杜撰に過ぎる。 いうのは、編者の校正洩れという重大性は免れない。にしても、ほとほと大手拓次は運が悪 (拓次の弟である櫻井秀男の御子息櫻井作次。 ああ! 没後に出た詩集でも甚だ不幸であった。「藍色の蟇」では白秋が生前に出版を約束して 哀しきかな! 拓次! 原先生に、直接、全集出版の件を聴いてみて貰ったところ、 奥附の検印も「櫻井」とある)である櫻井作 先生は二〇一七年に白玉楼中の人となられ 但し、逸見氏の「あとがき」では、 しかし、四十数年前、文学研究者と 「殆んど絶望

思議なデッサンが載る。 ブログ版の注の中に掲げておいた。] ト標題ページの下方に、このデッサンが使用されていたので、トリミング補正して、 底本では、 所持する岩波文庫原子朗先生の編になる「大手拓次詩集」(一九九一年刊)のパー 最後の詩篇(見開き右ページ)の左ページに、「のびてゆく疲労」という不 タイトルは左に記し、その下方に「1920,1」とクレジットする。

しろき花

暮れなやむ ゆふぐれのとき まさぐれば

青きまぼろし

おぼろなる あをきまぼろしなほ はるかにやいのち絶たむとおもへどもかなしさに

はるかなる あをきまあぼろしいのち絶たむとおもへどもふるへつつあり ふるへつつありまぼろしの

影は咲く

ひかりをうばへりとのかげは ひかりをうばへり

しきりに みだれさきけりそのかげは この日 われに耳なくて

かなしみ

かげをつくれりただ ひたすらに すがたもなく

泣かざる日なし

をみがまぼろしをいだきて こころ さびしさに ひそかに ひそかに

君病めりときけば

藻のごとく からみくるなり りのふるふなり そこしれぬ寂しさの

幻

水々なり 水泡のあれど とほきこずゑに たたずめり あはれ

ともしびの搖れの如く

きえがての思ひ うごきぬこの あした空につたはりくるとほき影の つながりて

たわわなる ゆれのごとくにともしびの

この心

ての心こそ おともなき みづのながれなり この心こそ この心こそ この心こそ なもなき芝生のうへの なりないころがれなり

歌のゆくへ

ほほゑめる ひとときのかげゆくりなく花をひらきしての歌の

ちちと 舞へりき ながれゆく この歌の ながれゆく

うすきいろ

春やくるらしかすめるごとしうすきいろ 空にかかりて

影はあらじ

そのかげは あらじ とめつつあり きみがおもかげを もとめつつあり また 春はきて 四月の日は かをらむとすれど ふたたび その影はあらじ

昨年の今日

かなしき 悦 びに おぼれゐたりしきみありし日の うれしさにきみありし日の うれしさにいいるりし日の ときめきに

した両端の指の爪の先に細い爪が長く生えた奇体な手首のデッサンがある。 「1920,8,16」のクレジットが記されてある。] [やぶちゃん注:この詩篇(右ページ)の見開きの左ページに、「黄色い手」と右上に記 右下に

春の日なれど

花咲きしと いふなれど

この心もて などゆかむ

つづまやかなる この悲しみを

やはらかき風の そと撫でゆけり

[やぶちゃん注:「つづまやかなる」「約まやかなる」。控えめで質素な。 つつましい。]

あきらかになりゆく影

さみしさの 淵にしづみゆけどみのわづらひに くづをれて

いよよ さやかに

うかみいづる そのおもかげ

まこと ひとときも消えさらぬ

そのみづいろのかげ

日の經るままによわよわしく。ただよへる影にはあれど

あきらかに なりまさりゆく悲しさ

ああ そのすずやかなる こゑのあらばや

木の間の花のごとく

もれいづる花のごとくかくれたる木の間より

かすかにも ゆれてきたりぬ

その しろきかほの にほはしさ

悲しみは去らず

日影のごとく うつろへどかなしみは かなたへ去らず

はてしなき いのちのなかに たそがるる

水に浮く花

こゑをはなてり うかべる花

白き悲しみ

わだつみの波 くづるるものをその しろきかなしみに ねがひは けむりの如くなるなかれ

海のふかみをたたへ

ひびきのみ けはひにつたふもの いまだ あらはれずもの いまだ あらはれず

ひとひらの雪

このためらひを いづこにすつべきや

身は ながるる雪のひとひらならむ

むなしかる いのちのうへに

きえがての

ひとひらの雪にや あらむ

詞的用法。「消えにくい様子であること・容易に消えないこと」の意。「消えがて」は動詞 [やぶちゃん注:「きえがて」「消えがて」。古語の形容動詞「消えがてなり」の語幹の名 「消えかて」が濁音化したもの。] 「消ゆ」の連用形に、「できる・たえる」意味の動詞「かつ」の未然形「かて」が付いた

はじらひの衣

はぢらひの衣 われをおほへり こころ ときめき こころ ときめき

あをきまぼろし

かぎりなく ひろごりゆく

あをき手のまぼろし

あをき月のまぼろし

げにもさみしき

あをきまぼろし

うつつなき 花をうがちて

こころむなしく しらべをおとす

白き月

しろき月のぼりぬ うすむらさきの うすくれなゐの 雲のまうへに

小鳥の如き溜息

しろき月 のぼりぬ

わが心にも

そことなく みだれつつありかたちを消して

時の彼方に たたずめりああ しろき小鳥のごとき溜息は

水底にうつるもの

うるはしきもの いよよ輝けり さだめなき 時のながれなり さだめなき 時のながれなり

いよよさあをに

わがみは いよよきよらかに わがみは いよよきよらかに わがあるは いよよきならかに

所持する岩波文庫原子朗先生の編になる「大手拓次詩集」(一九九一年刊)のパート標題 版の注の中に掲げておいた。] ページの下方に、このデッサンが使用されていたので、トリミング補正して、当該ブログ (右上に手書きで記す)がある。右下方に「1920,5,16」と手書きクレジットがある。なお、 [やぶちゃん注:この詩篇(右ページ)の見開きの左ページに大手拓次のデッサン「夕立」

きみを思へば

千鳥ぞ啼けり

きみのけはひの ちかければこのゆふぐれに 千鳥ぞ啼けり

朝の心

風のそよぎに ききいれば

身は いたづらに すぐるのみ) 強がおもかげの うかびいづ

くるしみ

わがおもひ ちぢにみだるる鳥のつばさ おもくしてゆふぐれよ ゆふぐれよ

むなしきこゑ

汝が聲のききたさに

ゆるしたまへや 薔薇をゆすぶる おろかさを かがひとむきの心から

一途に思いを打ち込むさま」を意味するのを、敢えて「一向きの心」として双方向性のないます。 ような心情の内的刷新も生ずるものと思う。] い片恋のそれを強調するために、この表現を選んだものと私は推察する。それゆえに次の [やぶちゃん注:「ひとむきの心」「ひたむきの心」に同じだが、「直向き」の意が概ねポ

きみとともにあり

いよよ あたらしきにほひはなてりわれ 夜ごとの祈りのなかに きみとともにあり

ひとつの影を慕うて

のがれゆくなり ひとつの影をしたひゆけど おとなきかたへ おとなきかたへ

悲しみのつばめ

かへりきぬ 時のかなたに おがかなしみのつばめ かへりきぬ

ふたたび見むことを

ああ

ふたたび汝を見むことを

せちにねがへり

かの秋の日の

芙蓉に似たるすがたをば

ふたたび われにみせよかし

ながあめに

しだり花かも

かよわなる 汝がおもだちよながあめに ぬれてうなだるる

みづいろあをの かほばせよ

ふたたび汝をみむことを

集」底本(私は所持しない)・三十二篇収録)では、 なっている。以下に示す。 集」底本(私は所持しない)・三十二篇収録)では、第二連が、二つに分離し、全四連と十月発行の初版の昭和五六(一九八一)年六月発行の第七版「世界の詩 28 大手拓次詩 [やぶちゃん注:「青空文庫」の抄録版「蛇の花嫁」(彌生書房の昭和四〇(一九六五)年

ふたたび見むことを

ああ

ふたたび汝を見むことを

せちにねがへり

かの秋の日の

芙蓉に似たるすがたをば

ふたたび われにみせよかし

ながあめに 汝がおもだちよ ^{*} ぬれてうなだるる しだり花かも

かよわなる

みづいろあをの かほばせよ

ふたたび汝をみむことを

あってよい箇所ではあるとは思うが、私は物理的に忠実に再現することを目的としているの 第二連はちょうどその部分で見開きでの改ページとなっているものの、ノンブルの真上に 行は配されてある。他のページと比較されれば、はっきり分かる通り、ここが左右のページ の版組の終行と初行である。従って、私は行空けを施さなかった。詩想からは、ブレイクが しかし、本「詩畫集」原本では、全三連である。ここがそれであるが、以上に示した底本の 「ふたたび われにみせよかし」と「ながあめに ぬれてうなだるる 分離は在り得ないのである。〕 しだり花かも」の二

夢を追ふ

かすかに消ゆる 夢を追ふながれ藻の 変がれ藻の

ひとことの彩

初秋のみちをあるけりかぎりなきよろこびの あふれつつかぎりなきよろこびの あふれつつかがりなきなるとなく 心ゆるやかにかぎりなきよろこびの あふれつつ

過ぐるもの

あたたかき 秋の日のゆふべなり こころは 石のうへにすわりて とどめがたきものの すぐるをききわけつ とどめがたきものの すぐるをききわけつ

浮べる水草

しろき路にむかへり しろき火に追はれ しろき火に追はれ

心かすけし

地にまよへり 心ちる花のごとく おもへば

〔自註〕「ゆけるひと」とはその人の遠く吾よりはなれていますを意味す。

そうなさま」を言う「幽けし」に同じ。 [やぶちゃん注:「かすけし」「幽けし」。「光・色・音などの対象がかすかで、今にも消え

かれている。 「1920,11,30」と左下に手書きした、蛙が口を開けて四枚の花びらを吹き出している絵が描 - - 最の詩篇(右ページ)の見開きの左ページには、大手拓次のデッサン「蛙の魔術」最の詩篇(右ページ)の見開きの左ページには、大手拓次のデッサン「蛙の魔術」 なお、底本の画像は国立国会図書館に許諾を求めなくては掲載出来ない。但し、

刊 が、文化庁の公式見解である。] さらに、平面的に撮影されたパブリック・ドメインの画像には著作権は発生しないというの このデッサンについては、所持する原子朗先生の「底本 大手拓次研究」(一九七八年牧神社 ブログで掲げたものをリンクさせておく。同書には特に転載禁止事項を挙げておらず、 の箱及び扉に当該デッサンが使用されていたので、その後者の方を、トリミング補正し

歌にかこまる

ちさき歌にぞ かこまれぬいづこともなく 歌にかこまれぬあはれなる身は

心うつらふまでうたへかし

ひとつの花

地にむかひて うなだれたりひとつの花あり ひかりのごとく

にほひの言葉

わがあゆみゆくところ

ながるる にほひのことばあり

草たわわなれどみちほそくして

ああ

この わがゆくところ

おほひなる ひとつの言葉あり

ながるるもの

まよなかに

ふと眼をさましつ

みづの態せる思ひはもそのままに

ながれゆくめり

はてしなく

ながれゆくめり さざなみの みづのすがたに

迷

S

われ われ わがすがたを消さむ このあをき雪の手にとらはれつ このもえさかる雪のなかに ゆれうごくおどろきのうちに こゑにおそはれつつ みづのほとりをゆかむとす すがたなく このみちのかなたにあり みちをゆかむとす 身をうづめむとす おとろへむとす

春のあをさに

薄氷の溶くる春のあをさに なやみの刺をぬぎすてむ このながながし 病氣の このながながし 病氣の

たちがたき思ひ

胸にたちこむる たちがたき思ひ 蟲のこゑ 耳に入るごとく そのままに ありしひをみれば かすかなるおくりもの そのかみの

白き芥子の花

いとほそき みちのうへに にほひつつありかのひとは しろき芥子の花のごとくかのひとは しろき芥子の花のごとくかのひとは しろき芥子の花のごとく

みちはさざめけり

さびしく あをく さざめけりこのゆくみちは かげのなかに さまよへど

こゑをうれしみ

日日をすごせり 5 なはしきこゑを うれしみ われは われは

心を献ぐ

きみがかたへに 死にゆかむきみがかたへに 死にゆかむ

何を語るらむ

今宵は 何を語るらむ また母上と なにをば語るらむ

悲しみのうたげ

かなしみの 宴の宵にふさはししつぶらなる實の みづみづとこころ惹けるも しぐれ月 のぶらみの

病める花

(一九二八・八夜、病める人を偲びてつくる)

この身にうつる 雨のまばたきおとづれもなけれど ひともとの 病める花

は不詳であるが、萩原朔太郎と室生犀星が拓次を下宿に訪ねている。 [やぶちゃん注:「一九二八」年は昭和三年で、創作時、拓次は満四十歳。この年、 月日

きで「1920,5,30」とクレジットがある。] は後から吹き出しで右に添えてある)と右に手書きで記したデッサンがある。下方に手書 なお、この詩篇の見開き(詩は右ページ)の左ページに、「淚とよろこびの眼」(「淚と」

しろき月

ゆふぐれの耳ぞかそけししろき月

秋の夜の夢(斷章二十二篇)



われしらず 心のふるふかがうはさ ききてさへ



かなしみは 淵瀨のごとし ゆかりなき 人にあたふる いっちょう しゅからなき はあらで



汝がすがた 汝がこゑを またも ゆめみき ゆめのなかにて

わが想ひをば 飾るなり 変が髪のおぼろのにほひかぎりなく 心しづめる夜のゆめにか

ゆめにみつつも くるしめりなほ おもひたらず

×

おもはゆき心もて あこがるる汝がかたはらに ちかよれずゆめにさへ わが心よわくして

わが想ひ 驅けらせむものああ ゆめよ ゆめよ

わが心 こほれるごとしさびしさの あふれきて

X

おもひの鳥と われ死なむ さよらなる このゆめに

X

くさむらの 繁みにしづむかさなりつ

指さへも のぶるあたはずわがゆめの さびしさ

ゆめにさへ ことばもいでず こころ はぢらひ

この世なりけれなかればこそ うつつも うつつ

わが心よわくして 甲斐もなしせめては ゆめに語らむとすれどわれとわが 心いたはりつ

わがおもひ たゆるなし ひとのいのちの はかなさを知りけれどゆめの さなかに

わがおもひ ながれ ながれぬながこゑに 汝がこころを偲び

かれは さまよふ 次をおもひつ 汝をおもひつ かすめるごとき ゆめの心に

風なきに ちりゆくをにほひつつ 散りゆくを

×

汝をおもひて ひたすらに辿りゆくのみかなしき秋のゆめに入る めちもなし 夜の祈りをささげつつ

ひかりある影をふくみて たゆたへり影をふくみて をののけりひらかざる みしらぬ花の

このゆめの つづきゆくまで 秋の夜の 夢あはくして

ゆめのなかにて 雨ふれど

み寺より 鐘のなりいづいづくともなく 鐘のなりいづ

胸をしめつくる悲しみ(斷章七篇)

しだり葉の 雨になびくがごとくきみをしのべり

身をしむるがごとしえしれざる涙あふれてかがおもひ わが胸にみちくれば

M

かなしみを たたへつつありまた わが髪も くちびるもわが眉も わが頼も

の辺り、 詩篇とは全く無関係な奇妙な絵が出て来るので、読者は甚だ面食らうこと請け合いで、こ 絵も総て同じだが、挿絵ページは別刷差込綴じなので、裏は何もなく、ノンブルも打たれ ここの右ページに載るが、その左ページには中央やや右に、手書きで、「蛙のたたかひ」 いる。右上には「1920,5,30」というクレジットが同じく手書きで記されてある。今までの (「かひ」は左下に分離) という、やはりキャラっぽくも奇形的なデッサンが挿入されて [やぶちゃん注:途中であるが、この前の前の詩篇の後ろ二行と、この詩篇が、見開きの ページとしても数えられていない。少なくとも、ここの場合、断章詩篇の中に、 編者の逸見享氏の意図が、ちょっと読めない。というか、今までの拓次のデッサ その置かれた位置の次から数えて十八ページ相当に定期的に出現しているので、 突然、

ブログ版の注の中に掲げておいた。] なお、所持する岩波文庫原子朗先生の編になる「大手拓次詩集」(一九九一年刊)のパー 拓次のデッサンは詩篇とは殆んど関係を持たずに配されてあると考えてよいようである。 そこに張り込み用のノンブルなしの台紙を全紙の時にセットした製本であったと考えれば、 ト標題ページの下方に、このデッサンが使用されていたので、トリミング補正して、当該

なげきのなかに しづむのみわがまなざしも

×

ほのぐらき空の默せり ゆふべのみ ゆふべにつづき

そは わが心にや とびゆけり なろく鳥 羽音かくして

ゆくへをしらず つばさなき わがこころとめゆけど

白き夢

しろきゆめありて 目ごとにわれをかこみぬ 日ごとにわれをかこみぬ かのあはあはと からめける

こゑごゑをよびかはすなり

夜毎に汝が健康を祈る (斷章六篇)

―汝がために祈ること三年になりぬ―



ささぐるに すべもなければわれ 心よわくして



幸の われにきたれり かなしみは 心にあれど



みたび よたび 汝がためにいのればひとり坐し

いとも しづかなり

 \aleph

心のなかに なみだながるる かたじけなさに と がために いのりうる

なんといふ うれしさよ ながために いのりき ああ ああ

汝がすがた いよよあかるし汝がために 夜ごと祈ればな

が く 月

月の すなほさ

薔薇のひと

そのあをき

まぶたの はづれに

しづみゆく ゆめをやどらせ

あめの日の 花のすがたに

うかびくる

かのしろき

うばらのひと

Rosa multiflora)の別称でもあり、ここはそれ。] に野茨(野薔薇とも言う。双子葉植物綱バラ亜綱バラ目バラ科バラ亜科バラ属ノイバラ [やぶちゃん注:「うばら」は「茨・荊棘」で刺のある植物の汎称である茨を指すが、別

雨のしぶく日

わがこころ

わがものならず

はかなさに おびえつつあり

されどなほ

待つもののあるかのごとく

みしらざる花を ゆめみむ

この願ひゆるされよ

われ これより眠らむとす

ねむりのまへに

きみがために幸を祈るなり

このねがひ ゆるされよ

さ び し さ (**)** (**))** 章五篇)

さびしさの 身をきざむなるわがこころ いよいよよわく

秋の日に 飯も食べえずかなしさの 胸にこもりて汝をおもへば

みしらざる にほひの花よいづこにありや あらざるまへにみりや

身をなげすてむ 風ありて 雨をしぶきぬ

さびしさは 波のうへの舟ならむ

さかまける水泡のしたに

さそはるる

るが、再現しておいた。] [やぶちゃん注:第二連の の前が二行空けとなっているのはママ。 誤植とも思われ

おもひの花

ささやきあへり 花をひらけば そのにほひ

標題ページの下方に、このデッサンが使用されていたので、トリミング補正して、当該ブ り、 り、 [やぶちゃん注:本篇の見開き(詩篇は右ページ)の左ページには、奇体なデッサンがあ グ版の注の中に掲げておいた。] 所持する岩波文庫原子朗先生の編になる「大手拓次詩集」(一九九一年刊)のパート 手書きで右手に「美貌の性欲」、その下方に「1920.」(下方に分離して)「11, 5」とあ その右下に判読不能の文字らしきもの(「に」の崩しのようにも見える)がある。な

とあるので、 [やぶちゃん注:**以下の標題の「六篇」はママ。** 誤記或いは誤植であることが判る。 巻末の目次を見ると、「眞實(斷章二篇)」 本文では「六」はそのままに電子化した。]

寅 (斷章六篇)

碎けども 碎けども 消えざる眞實を真實なるものの 頑固をもてり まことわがおもひ 磨かざる寳石のごとく

もゆる火のごとくわれはきく ことのはを

形なき影をもとめて

かたちなき かげをもとめて さだめなく 暮るるならむか

あをき日

とはに うるはし あをき日に つねがひ うつろはず このねがひ うつろはず

[やぶちゃん注:「窗」は「窓」の異体字。]

汝がこゑの美しさ

したたる露

汝がこゑ ただよふ 香

汝がこゑ ゆらめくひかり

汝がこゑ ひらく花びら

汝がこゑ ちらばふ星

汝がこゑの こぼるる蜜

汝がこゑの くれなゐのつぼみの瓊

汝がこゑの

汝がこゑ 0

汝がこゑの

汝がこゑの

汝がこゑの 春の終雨 春の終雨 銀色の衣ずれ またしき君影草 いぢらしき君影草 いぢらしき君影草 のなばけし かなげた でながけた。 でながけた。 でながけた。 でながけた。 でながけた。 でながけた。 でながけた。

汝がこゑの

汝がこゑ 0 水面の浮鳥宵のくちべに

汝がこゑの

汝がこゑの 揚羽の蝶の朝の舞

汝がこゑの 水晶色の鈴のおとづれ

汝がこゑの うすあをき月草の物思ひ

汝がこゑの うまるる雛鳩

汝がこゑの

雪色の のこゑのうるはしさ

[やぶちゃん注:「くれなゐのつぼみの瓊」「瓊」は「美しい宝玉」の意であるが、 ここは

platyphyllum)『と外見が似ていることもあり、 科ネギ亜科ネギ属ギョウジャニンニク亜種ギョウジャニンニク Allium victorialis subsp. 「君影草」被子植物門単子葉植物綱キジカクシ目キジカクシ科スズラン亜科スズラン属ス恐らく薔薇の花の蕾を形容している。 有毒植物』で『有毒物質は全草に持つが、特に花や根に多く含まれる。 ン (convallatoxin)、コンバラマリン (convallamarin)、 の好きな花の一つだが、当該ウィキによれば、実は全草に『強心配糖体のコンバラトキシ ズラン Convallaria majalis の古い異名。「君影草」。「谷間の姫百合」という別名もある。私 北海道などで山菜として珍重されるギョウジャニンニク』(キジカクシ目ヒガンバナ 眩暈、 心不全、血圧低下、 心臓麻痺などの症状を起こし、重症の場合は死に至 誤って摂取し』、『中毒症状を起こす例が見 コンバロシド (convalloside) などを含む 摂取した場合、嘔

花瓶の水を飲み』、『死亡した例が書かれている』とある。 る。 (私も所持する)『には、五歳の子どもが枕元に置い 有毒性を示すことにしている。趣味が悪いのではないので、 スズランを活けた水を飲んでも中毒を起こすことがあり、 私は有毒生物の博物学的 てあったスズランの活けられた 悪しからず。 上野正彦著「死体は語 注 で

た感じの花弁が好きになれない。 生の葉の摂取は危険性が』指摘されており、『妊娠中や授乳中の安全性については情報が 別名「虞美人草」。 不足しているため、摂取を避けることが求められ』ているとある。私はあの、 酸性傾斜)、『瞳孔収縮、 使用され、『安全性が示唆されているが、焼いた花の多量摂取は危険性が示唆され、 「雛罌粟」被子植物門双子葉植物綱キンポウゲ目ケシ科ケシ属ヒナゲシ Papaver rhoeas 。 吐き気、 嘔吐、 民間では、当該ウィキによれば、乾燥させた花は生薬として咳止めに 胃痛、 強直間代性発作、 不安、 痺れ、 意識喪失を生じることがあ』り、『小児の花や 呼吸困難、乳酸アシド ーシス』(血液の病的な カラカラし

「宵のくちべに」前後が総て名詞節で終わっているから、 「口紅」という感覚的象徴である。 「くちべに」 は 「口邊に」 では

ことが多いマツヨイグサ類(太宰治の ある老婦人であることを、とうに知っていたのだが。 錯覚である。私の新築前の内庭には、 Oenothera tetraptera を想起される読者もいるかも知れないが、ツキミソウは純白であり、 合ふ」のそれは恐らく双子葉植物綱フトモモ目アカバナ科 Onagroideae 亜科 はそれ以前からの不審な行動(その人は、何度か家の中から窓越しに垣間見たのだが、 帰ってみると、誰かが侵入して、ごっそり株が剝ぎ取られて盗まれていた。 私も偏愛する双子葉植物綱バラ亜綱フトモモ目アカバナ科マツヨイグサ属ツキ つも物欲しそうに月見草も見つめていたので)から、 が合わない。見かけ上、月夜でツキミソウを見ると、薄く青みがかって見えるが、それは クサ科ツユクサ亜科ツユクサ属ツユクサ Commelina communis の古い別名である。或い 「うすあをき月草」「つきくさ」で、花の「薄青」色から、 グサ属オオマツヨイグサ Oenothera erythrosepala である) 沢山、自生していたが、三十五年前の夏のある夜、 「富嶽百景」の名台詞の「富士には月見草がよく似 なお、私は同じく「月見草」と呼ぶ その「誰か」を、 単子葉植物綱ツユク は品のない黄色が大嫌いで 私は、 いや、 はっきり、

うまれざる花

にほひをおぼゆ こころ しぐれのなかに

朝な朝な

朝な朝な まどろみつ まどろみつ

こゑなき聲

こゑなきこゑの つたはりくるひとしほに きみをおもへば

汝がこゑをきくごとに (斷章十篇)



はぢらひの花 みだれちるわが胸は さざなみだちて汝がこゑをきくごとに

むらさきの 夢路をたどるよろこびに 心ときめきつ汝がこゑをきくごとに

身うちもふるふ 細雨にぬるる葉のごとく うれしさに 息づまり

かなしきものの うまれくるなにとはなしに 胸せまり汝がこゑをきくごとに

×

とはの生命をささげむとす汝がために おほいなる思ひの力 おそひきておほいなる

われもなし いひがたき よろこばしさに かくわくとして

わが胸の夜はあけゆきて汝がこゑをきくごとに

空のさなかに 夢を織る羽ばたける小鳥のごとく汝がこゑをきくごとに

M

ややにして ほころびむうまれざる ひかりの花の汝がこゑをきくごとに

X

わがたどるべき ひとつの路ぞとこしへの ひとつの路ぞみゆる汝がこゑをきくごとに

は、「な」が相応しいとは思われる。しかし、思潮社の詩集のルビは、根拠が不明で、凡 は一篇の中で「な」と「なれ」が混用されているケースもあるが、起こしの頭の韻律から 詩集」(一九七五年刊) 例注記もなく、私は編者による恣意的なルビをも疑っているので、「な」を無批判に支持 することは、微妙に留保するものである。 [やぶちゃん注:「汝」にはルビがない。所持する思潮社の『現代詩文庫』の「大手拓次 では、「汝」には「な」とルビが振られている。ここまでの詩篇で

に近いが、 た)と標題があり、右下に非常に薄いが、手書きで前にアルファベットのように見える何 あるが、見た目と、 かが見え (判読は全く不能)、 風のデッサンがある。右に手書きで「春の倦怠」(「の」と「怠」は殆んど判読不能である この詩篇の最後の二章が見開きの右ペー 巻末にある「挿繪目次」の「10」がそれであるから、 これまでのデッサンのクレジットから推定確定した)「5.16」とある。] その後に少し離れて「1920.」 ジに載り、左ページには波型のオブストラクト (実際にはかなり判読が困難で それに従って字起こしし

ひとすぢの髪

(彼のひとよりひとすぢの髪もらひしを思ひいで)

ああ すぎゆきし年月のそのかみの日の偲ばるるひとすぢの髪 思ひいでつつ

かへらましかば

昨 夜のゆめ

わが耳にかよへるを 汝がこゑの 昨夜ゆめみき

そのこゑの

霧にうすれし態なりし野風にゆるる姫百合の

[やぶちゃん注:「ゆうべ」はママ。]

總てを與へむ

愛するものよ

汝がために われは與へむ

わが身體をわが心を

わが生涯を

ああ

われは與へむ 愛するものよ

汝がために

わが呼吸を

わが日ごと日ごとの思ひをも

愛するものよ

われは與へむ 愛するものよ

わが生命をもわがすべてのものを

汝がために 與へつくさむ

たわめられたる小枝のごとく

この日頃

さびしさに うちひしがれてたわめられたる小枝のごとく

ただ くらき路のみゆけり

知られざる草

とこしへの淚あれ おもひとこそは いふなかれおもひとこそは いふなかれ おものとこそは いふなかれ

小蟲のごとく

日は はれたれど 日は はれたれど 小蟲のごとく 小蟲のごとく 小蟲のごとく

雨の柳

ふりみだす髪の しだれよ しだれ しどろに みだれなびくよ れるがくよ あんしどろに みだれなびくよ

わがことば

わがことば きゆばかりなりこころ かなしきときは

わがことば ふるへつつおぼろなりこころ さびしきときは

熱くするどし 鋼鐵のごとく かがことば 鋼鐵のごとく

無き 花

そは 何のしるしぞやわれをおとづれたり 黒き花

苦悶のこゑを爲すみじろぎもせでみじろぎもせで

銀の角笛を思へども

つばさかろきを 如何にせむあをぞらをゆく紅鳥の くらくして

なべて 色なし 腹にうつるもの くらくし

は出来ない。] 正が丹念に行われていたが、 目次の誤記の可能性が疑われるように思う。標題の誤りは、前の場合には、手書き鉛筆補 [やぶちゃん注:この詩篇、 ここにはないからである。 巻末の「目次」に従うと、「銀の角笛」であるが、或いは、 なお、「紅鳥」は種の同定が私に

眼をとざす

眼をとざす われは とらへむとして こころのすがた

がある。] 物」と右上に記した奇体なデッサンが載る。 [やぶちゃん注:最後の詩篇は見開きの右ページで、左ページには、手書きで「白晝の魔 右下方に手書きで「1920,5,16」のクレジット

心病む

あはれにも いたいたしかがこころ 病めれば

汝が影

木末葉のさやぎのごとく ながかげの そよろにもうつるなりかがこころ くもりなければ

ゆふぐれの時(斷章四篇)

かなしみの蝶 わが胸にありゆふべ せまれば

わがむねの あをきそこひにかへりきたりぬ

なげきのすがた ひそみゆく このゆふぐれの

四月のごとく さわやげり汝をおもへば わがこころいとしきものよいとしらるのよ

まよひゆかむとすれど

きみが心のなかにありなほ きみが心のなかにありない さみが心のなかにあり

われ ひとの世のみちに ながらへむああ このかなしみをもて

うつりくるにほひ

眼にあらず にほひのあれば

手にあらず

耳にしも あらざれど

かげろへる にほひの

わが心をば

いだきしづめけり

しのべる聲

かげをみだせりゆきすぐる薔薇のごとくもとほくに うなだれ

わが 靈 はよみがへれ

ながためにこそ ながためにこそ ながためにこそ ながためにこそ

わがたましひは

よみがへれ

なる。逸見氏はパブリック・ドメインである。 ページ数は略した。本文ポイントが小さいが、見にくくなるだけなので、無視した。] 以下、「目次」であるが、リーダ(最後の逸見氏の「あとがき」のそれは生かした)と 以下、「目次」・「あとがき」(編者の逸見享氏よるもの)・「挿絵目次」とあって、奥附と

[やぶちゃん注:以上を以って詩篇本文は終わっている。

目次

ほのあをき貝

しろきもの

日のグラウミを

語らざる言葉

ふるへる羽

相見ざる日(斷章六篇)

ほがらなるこゑ

汝が顏のしづめるとき

さだかならぬ姿

) 外の日まれ

秋の日はうすくして

二人靜

あまりによわく

夜の祈りをささぐれば

日もすがら夜もすがら

心のかげのこゑ

ゆめ(斷章二篇)

火雨) 1 夜となれば

秋雨の日

なやみ

さびしさの消ゆる日は

汝がまへにある時

遠く思はるる日

鳥の影

蘆の葉のごとく

わがかたはらの月光

すぎし影

ゆふぐれ

しめらへる花

九月

冬の日

花をみつつも

のをき影

日は暮るる

しろき花

青きまぼろし

影は咲く かなしみ

泣かざる日なし

君病めりときけば

ともしびの搖れの如く

この心 歌のゆくへ

影はあらじ うすきいろ

昨年の今日

春の日なれど

あきらかになりゆく影

木の間の花の如く

水に浮く花 悲しみは去らず

白き悲しみ

海のふかみをたたへ

ひとひらの雪

はぢらひの衣

あをきまぼろし

白き月

小鳥の如き溜息

水底にうつるもの

いよよさあをに

きみを思へば

朝の心

千鳥ぞ啼けり

くるしみ

むなしきこゑ

汝が聲のききたさに

きみとともにあり

ひとつの影を慕うて

悲しみのつばめ

ふたたび見むことを

夢を追ふ

ひとことの彩

過ぐるもの

浮べる水草

歌にかこまる

ひとつの花

にほひの言葉

ながるるもの

迷 ひ

春のあをさに

たちがたき思ひ

白き芥子の花

みちはさざめけり

こゑをうれしみ

心を献ぐ

何を語るらむ

悲しみのうたげ

病める花

しろき月

秋の夜の夢(斷章二十二篇)

胸をしめつくる悲しみ(斷章七篇)

白き夢

夜每に汝が健康を祈る(斷章六篇)

輝く月

薔薇のひと

雨のしぶく日

この願ひゆるされよ

さびしさ (斷章五篇)

おもひの花

眞實 (斷章二篇)

形なき影をもとめて

あをき日

汝がこゑの美しさ

```
うまれざる花
```

朝な朝な

こゑなき聲

汝がこゑをきくごとに(斷章十篇)

ひとすぢの髪

昨夜のゆめ

總てを與へむ

たわめられたる小枝のごとく

知られざる草

小蟲のごとく

雨の柳 わがことば

銀の角笛

黑き花

[やぶちゃん注:当該詩篇電子化の注で述べた通り、 ママ。 本文標題は「銀の角笛を思へ

ども」である。]

眼をとざす

汝が影 心痛む

まよひゆかむとすれどゆふぐれの時(斷章四篇)

うつりくるにほひ

しのべる聲

わが靈はよみがへれ

あとがき…………逸 見 享

あとがき

1

ばならぬ。 の不思議な書を偶然世におくることになつた驚きと喜ぴとを是非語ら

とつて暫く繙いてゐたが「この詩集はどうしたんですか」といふのである。 風のスケツチブツクが幾册か混つてゐることを發見した。 次の日記は以前にも見たことのあるもの 人の甥大手由五郎、 時のことである。 と版畫誌「風」時代からの友人澤田君と磯部を訪ひ、拓次の墓前に報告旁々お參り 晩秋のある日、 宿舍磯部 やうやく大手拓次 櫻井作 次の兩君が十餘册の日記と帳面を持參したので皆で調べた。拓 館の三階で、私達が夕食をすませ、うちくつろいでゐる 小曲 であつたが、 集の編纂も濟 尙その中には相當の厚味のあ んだので、 初見の澤田君が先 發行を引受けてく づそれを手に る書籍 をした ٤

全な詩集がないのである。 であつた。最後に目次まで附され 私は思はずそれを手にとつて檢べてみると、 **!集なのである。しかも、まへがき、序詩まで備つて、** てゐるとい これは正しく拓次自身が生前 ふ入念さに至つては故人にとつてこれ 一頁に一詩を丹念に清書したも に作 こつて置い

そし とになつたのである。 これは立派な詩集だ。 て、それと同時に發見された故人の畫集か このまゝで好い。 このまゝ印刷にかけやうぢやないかと一 ら若干の繪を採つて、 詩畫集として出 決した。 すこ

ていないのもママである。 [やぶちゃん注:冒頭の ¬ 蛇 の 花 嫁 の 一字空、 け は マ マ。 行 頭 は --- 字空け に は な つ

ネットでも掛かってこない。 「大手拓次小曲集」不詳。所持する大手拓次の関連書や年譜類を調べたが、 見当たらず、

認出来る。 ○四) 年~昭 「澤田君」秋田県小坂町生まれの出版人 本文にも出 和六三(一九八八) る版画雑誌『風』 の再刊 年)であろう。 一号に、 で版画家でもあった澤田 逸見と一緒に 「愛知県美術 作品を載 館」公式サイ 伊 四 郎 せて (明治三七 ト内のこちら いることが確

地に彼の墓はある。 「磯部」大手拓次の生地にし 航空写真)。 べたところ、 て墓 の ある、 この共同墓地内と推定される 現在 . の 群馬県安中市磯部。 (グー 磯部三丁目の共同墓 グル・ マ ツ

大手拓次が繪を描いてゐた!

特異性の尋常ならざることに深い驚きを感ずるのである。 既にかうしたものを描出しないでゐられなかつた彼の詩魂を思ふ時、 二册であつた。それはおそろしく幻想的なもので、 その畫集といふのはスケツチブツクにペン一色で描いたものと、 は彼自身、 といふことはおそらく彼を知る限りの人々は勿論のこと、 詩では到底あらはせないものを繪であらはさうとしたもので、今から二十年前 その畫集の自序にもあるやうに、これ 私にとつても一つの驚異 色鉛筆で描 私は今更乍ら故人の 品いたも のとの である。

影をひそめることになつてしまつた。 かうした經緯から、私の集めたかなり澤山な詩篇も、また實に好いもの であるが、 眛

[やぶちゃん注:「といふことは……」の頭は一字下げにはなっていない

○)年に書かれた「九月の悲しみ」という全く関係ない詩稿の一部とを、 ○)年(数え三十三歳)に描かれたものであり、 そこは二度に亙って書き変えている)、本「詩畫集」の「畫」は-一様に洩れなく感じられたはずだが! 「今から二十年前」既に第一回のデッサンのクレジットについての注で述べた通り ングしたものだった、 ーない― **―グロテスクなデッサンなのである。それは、絵の方が大正九** ということを意味するのである。〕 -顫える切ない恋情の「詩」篇群とは-詩篇はそれから十年も後の昭和五(一九三 ―全部を見られた方は、 逸見が勝手にカッ **一これ**一

3

される詩集であつたのに比して、この「蛇の花嫁」は飽くまでも秘められた、 或はまた彼自身ではさほど重要なものとも思つてゐなかつたかも知れぬ。しかし、この未 は思ふのである。 を知られることは て「命を絕たむ」思ひをした詩の技ではなかつたらうか、そしてまた「藍色の蟇」が發表 の詩集のまへがきが語るやうに、この詩集こそ、薄幸な一人の詩人がそのを生涯をかけ さて、拓次にとつてこの未刊の詩集は、永久に秘藏しておくぺきであつたのかも知 「みづからを削られる」 思ひの詩人のいのちではなかつたらうか、 しかもそれ ħ

1

つたといふことが出來るかもしれない。 である。見方によつては、あの燦然と光芒を放つ前詩集もこの詩集に至る道程の 「藍色の蟇」は佛蘭西の香がしたであらう。 前記「藍色の蟇」が大手拓次遺稿詩集として刊行されたのであつた。 しかしこの「蛇の花嫁」は純粹な日本人の詩)所産であ

このうちに盛られたひとつびとつの詩は、 また一大長詩であり、 個々の詩はその一節とも見られる不可思議な詩集だとも それぞれ立派な詩でありながら、 この

る。 のではなからうか。 から靜かに歌つたものであり、それだけにあまりに純粹でありすぎて、 これは世にも不思議な男が、ひとつの生きた寳玉を抱いて愛撫しつつ、 世の注意をひかぬ いろんな角度

たのである。 いや、私は思ふにこの詩人はその持つてゐた實珠をあまりにも世の中から隱しすぎてゐ

る。 だが 愛唱される日の近きを祈りつつ、この「蛇の花嫁」を世におくりたいと思ふ。 好いものはそれ自身光つてゐることによつてはつきりとその存在意義をもっ てゐ

が」の後の一字空けはママ。〕 [やぶちゃん注:「寳」と「寶」 の混在はママ。 「ひとつびとつ」はママ。 最終段落の

5

協力者を得て眞に心强く感激してゐる。 も出版者しての良心的態度に敬意を表したい。拓次も幸であり、また私としてもこのよき この詩集がかうすらすらと出來上つたについては、 澤田君のあたたかい 友情といふより

惜の情を禁ずることが出來ない。 の命日に逝去された。まことにこの兄弟の血緣の不思議さを想ひ、泉のやうに湧き出る哀 また、拓次歿後、 遺稿發行その他一切の面倒を見て來られた令弟櫻井秀男氏は昨年拓次

みをも夢となつてしまつた。 この書も生前枕頭に持參して、共に喜んでいただくつもりであつたが、 ここに深くおわびし冥福を祈るものである。 今はもうその望

5和十五年晚秋

見

享

逸

[やぶちゃん注:「拓次の命日」 冒頭注で示したが、 昭和九 (一九三四) 年四月十八日で

小さいが、 以下、挿絵の目次。挿絵ページにはノンブルはない 見にくくなるだけなので、 無視した。] ので、 以下の通り。 本文ポイントが

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 黄色い手 のびてゆく疲勞 蛙の魔術 蛙のたたかひ 蛙のたたかひ 夕立

白晝の魔物

公定価格品は「○に公」、許可価格品は「○に許」の価格符号表示を実施』したとあるそ を付記することにな』ったとあり、『商工・農林省、暴利行為等取締令の改正により』、 ままの再現ではない。全体は二重罫線(外側太線)で全体が囲まれてある。「傍」は、国 れである。] 止令以前』の『製品は「○に停」、 令の改正により』、『価格表示規程が書籍雑誌にも適用され、定価に「○に停の字」の記号 立国会図書館の「レファレンス協同データベース」のこちらの回答によれば、『暴利取締 『価格表示規程を告示。 [やぶちゃん注:以下、奥附。多少、それらしく字の大きさを変えた箇所もあるが、 一般商品につき』、昭和一三(一九三八)年の『九・一八価格停 その後の新製品は「○に新」、 協定価格品は「○に協」、

の 花嫁」 限 定 版

昭和十五年十二月十五日印刷

昭和十五年十二月三十日發行

本書の刊行部數ハ七百册 本文ハ沙漉鳥ノ子紙 表紙ハ銀揉鳥ノ子紙

價 四 圓

東京市芝區新橋際・復興ビル 發 行 東京市京橋區築地一ノ六 版 印 刷所 者 櫻 田 印刷 作 拓 兀 郎 所

發 行 所

東京市芝區新橋際・復興ビル

振替口座東市五〇六五

電話銀座一六〇二・四七六一

[やぶちゃん注:「櫻井」は別紙貼付の上に検印。「沙漉」は「しやすき (しゃすき)」で

大手拓次詩畫集 蛇の花嫁 正規表現版・ 藪野直史注 完 櫻井

あるが、

「紗漉」

の誤字である。

柿渋をひいた絹紗を簣に張って漉く行程を指す。]